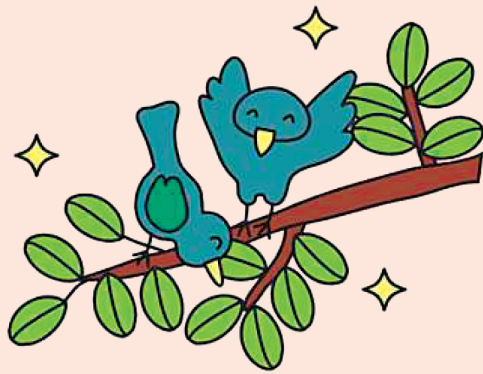


# 事例集





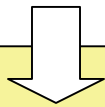
# 1 支援の道すじ

事例を通して考えてみましょう



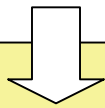
## ステップ1 困っているのは誰？

一番困っているのは、子供本人です。  
支援者の困り感で考えるのではなく、子供本人の困り感を考えていきましょう。  
不安な子供の気持ちを救うことが大切です。



## ステップ2 その子供の気持ちになって考えてみよう

問題行動には理由があります。  
「なぜ、そのような行動をするんだろう？」「どうして、この子供には問題行動が多いのだろう？」「生活状況は？」「家族の状況、園の状況」など、いろいろな視点から考えてみましょう。

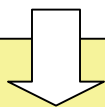


## ステップ3 「暫定診断」をつけてみよう（仮の診断）

なるべく早期に正確な診断がつくことが望ましいのですが、診断までに時間がかかったり、保護者が診察を拒否する場合などに、「とりあえずの診断」が大切になります。「暫定」とは、「とりあえず」の意味です。

支援者が「不思議だね。」「なんか変だね。」と感じた時、「それは何だろう？」と考えて、「名前」＝「とりあえずの診断」をつけてみましょう。名前がつくことで、その子供の支援の方向性が見えてきます。「暫定診断」は早期支援のヒントです。

「暫定診断」をつけるということは、子供を理解し、どうしたら良いかを考えることにつながりますが、なるべく早期に専門の医師に相談するようにしましょう。



## ステップ4 子供に合わせた対応を考えてみよう

子供の特徴に合わせた工夫をいくつも考え、良い方法を探しましょう。  
例えば、大工さんもいろいろな道具を使って家を建てます。支援者である私たちも、あの手、この手を考えましょう。

## 2 事例

### 事例1 お母さんから離れられなくて泣く子供

A君 5歳 男の子

毎朝、お母さんと一緒に登園しますが、保育園に着いたあと、なかなかお母さんから離れられず、大泣きしてしまいます。お母さんと離れてしばらく経つと落ち着きます。

昼食後のお昼寝がいやで、眠ることができません。

キーワード

- ・5歳
- ・親と離れられない。
- ・お昼寝ができない。



ステップ2

A君の気持ち

- ・お母さんと離れたくないよ。
- ・もう会えなくなっちゃうかも・・・
- ・なんか、いつもと違うよ。
- ・お母さん、いつ来てくれるの？

### ステップ3

#### 「暫定診断」：分離不安障害

不安の中核である「扁桃体」が、過敏に働いているのではないかと考えられています。

分離不安とは、保護者や家など愛着のある人や場所から離れる時の不安を言います。こうした症状は小さい子供であれば誰にでも起こり得るものですが、年長でも不安が強すぎたり、その不安のために登園できないなど行動面で問題が起きている場合は、分離不安障害を疑います。

時々、頭痛や腹痛などの身体症状や、「赤ちゃんがえり」、夜尿などが見られることもあります。「家族と離れるのが寂しい」「何か怖いことが起きるのではないか？」という不安があることが特徴です。



### ステップ4

#### どんな対応ができるかな？

- お母さんが一緒に登園したあと、徐々に離れる練習をしましょう。
- 子供にお迎えの時間を教えましょう。（見通しが持てるような工夫）
- クラスに入るタイミングが分かるような工夫をしてみましょう
  - 例1）一度、静かな場所で過ごし、落ち着いてからクラスに入ってみる。
  - 例2）キッチンタイマーやアナログ時計の針を合わせ、「長い針が〇〇のところに来たら、クラスに入ろうね。」と見せる。
  - 例3）場面を切り替えることを書いた「絵カード」など、目で見て分かるものを使ってみる。

- “パワーカード”を見せて励ますのも良いでしょう。

“パワーカード”とは…

例えば、子供が好きなタレントやキャラクターが、「〇〇ちゃん、大丈夫よ。僕（私）が味方だよ。応援しているよ！」などと書いた「手作りカード」

## 事例2 お散歩中に固まる子供

Bちゃん 5歳 女の子

Bちゃんはお散歩が苦手です。

店先に置かれた人形や、人の顔が載っているポスターの前を通ることができません。「大丈夫だからね！」とみんなが言っても通ることができず、固まって（フリーズ）しまいます（そのため、先生がおんぶして通ります）。

最近、運動会の練習が始まりましたが、一度、お遊戯で失敗してしまった後、いやがってなかなか参加できないでいます。

キーワード

- ・知らない道や場所は怖い。
- ・人形や人の顔のポスターが怖い。
- ・運動会の練習や失敗がいや。



ステップ2

Bちゃんの気持ち

- ・外（知らないところ）は怖いものがいっぱい。  
いやだよ～
- ・（お人形の）目が怖いよ。口が怖いよ～
- ・（今日の運動会の練習は）何をやるんだろう？  
失敗しちゃったらどうしよう・・・

### ステップ3

#### 「暫定診断」：社会不安障害

脳の「扁桃体」が過敏に働き、「怖い」という気持ちがうまく処理できないことが考えられます。

「普通は、何でも無いもの」を「怖い」と認知してしまうため、いくら言葉で「大丈夫」と伝えてもなかなか理解できません。

「一緒にやってみる」⇒「できる」⇒「できた」ということを共有する（一緒に喜び、確認する）ことが大切です。

社会不安障害では、家族の中の他の人にも不安が強い場合があります。不安があまりにも強い場合は薬を用いることがあります。



### ステップ4

#### どんな対応ができるかな？

- 人形やポスター（怖い対象）などに、はじめのうちは無理に近寄らないようにしましょう。その後、少しずつ、近寄る距離を縮める練習をしましょう。
- 初めてのことは「予告」しましょう。  
例）「絵カード」などで、場所の説明、時間に沿った行動の説明など、子供にわかるように工夫してみる。
- 子供が「見通しを持てる」工夫をしてみましょ。う。  
例1）子供と先生とで、先に“こっそり”練習してみる（ひみつの練習）。  
例2）園の遠足で出かける場所に、家族で下見に行ってみる。
- できたことがあったら、子供と一緒に喜びましょ。う。  
「できた！＝達成感」が「自己肯定感」を育てることにつながりましょ。う。

### 事例3 運動が苦手な子供

C君 5歳 男の子

C君はボール遊びが苦手です。C君のところに来たボールをうまくお友達に投げ返すことができません。最近ではあまりお友達の輪に入らなくなりました。

工作の時間では、うまくハサミが使えず、みんなと同じように作品を作ることができません。

キーワード

- ・ボール遊び、なわとびが苦手
- ・工作やぬり絵が苦手
- ・ハサミが使えない。



ステップ2

C君の気持ち

- ・ボールがうまくつかめないんだ・・・
- ・投げようと思っても、どうしたら良いかわからないんだよ・・・
- ・うまく切れないよ。丸くなんて、切れないよ。



### ステップ3

#### 「暫定診断」：発達性協調運動障害

脳の中の、運動にかかわる神経ネットワークが未成熟だと考えられます。

運動が苦手な子供には、身体の感覚がつかみづらく、複合した運動を行うことが難しい特徴があります。

そのため、動きがぎこちなくなり、手先が不器用な場合が多く見られます。

時に、多動やこだわりを合併することもあります。



### ステップ4

#### どんな対応ができるかな？

- 「やってみて！」 「がんばって！」 だけではできません。できないことを「がんばれ」と言ってもできません。具体的に一緒にやってみましょう。

例) 「肘をこう曲げて」「顔はこっちに向けて」「こうやって、しゃがんでみて」など、子供に一つ一つわかりやすく話し、一緒に行く。

- 「全身運動 ⇒ 指先の運動」というように、大きな運動からより小さい、細かい運動へと進めてみましょう。

例) ボール遊びであれば、「大きなボールを転がす、投げる ⇒ 小さなボールを転がす、投げる」というように行う。

- 他の子供よりも時間を多く取り、繰り返し練習しましょう。
- より簡単で、取組み易い動作や運動からからやってみましょう。できることからやってみることで、「できる気持ち」を育てましょう。
- 子供が「身体を動かすのが楽しい！」と思えるように関わりましょう。「競争する運動」ではなく、「楽しめる運動」を選びましょう。

## 事例4 おとなしい子供

Dちゃん 6歳 女の子

幼稚園でほとんど話さず、うなずくか首をふって返事をする程度です。

ある日、先生が「ちゃんとお口でお返事してごらん」と、やさしく言いましたが、Dちゃんはそのままの状態であまり固まって（フリーズ）しまいました。

お迎えに来たお母さんに、家での様子を訊くと、「家ではよく話しますよ」と、戸惑った顔をされてしまいました。

キーワード

- ・家では話すのに、園では話さない。
- ・話すよう促すと泣いたり、固まる（フリーズする）。
- ・不安なことが多い。



ステップ2

Dちゃんの気持ち

- ・しゃべりたいけど、言えないの・・・
- ・ほんとはね、困っているの・・・

### ステップ3

#### 「暫定診断」：場面かんもく

不安や恐怖を感じた時に活動する「扁桃体」が過度に働いていると考えられます。

脳が「しゃべってはいけない」と命令している状態なので、無理に話させようとするとそのままの状態でも固まって（フリーズ）しまいます。

幼児期、または小学校・中学校の間、あるいは大人になってから、急に話せるようになることもあります。日本では女兒に多いと言われています。



### ステップ4

#### どんな対応ができるかな？

- 無理に話をさせることは、やめましょう。
- 安定した受容的な関わりをしましょう。
- 子供の緊張や不安、恐怖感を減らすような関わりをしましょう。
- 子供が話さなくても安心できる場をつくりましょう。
- 言葉以外のコミュニケーションの取り方を工夫しましょう。

例) うなずきや首振りなどの動作、「絵カード」の利用、携帯メールなどで、意思の疎通を図る。

- 得意なことをみつけて、自信が持てるような関わりをしましょう。
- 社会的な関わりはきちんと持ちましょう。  
例) 話さなくても、ルールや約束はきちんと守れるようにする。
- 個性の一つとしてとらえ、他の子供たちにも話し、いじめの対象にならないよう配慮して見守りましょう。
- Dちゃんの特徴を小学校にも伝えましょう（年齢的移行）。

## 事例5 パンツにうんちをしてしまう子供

Eくん 5歳 男の子

いつもパンツにうんちをしまいます。

おしっこはトイレで一人でできるのに、うんちの時は誘っても行かないのです。うんちをした後は教えてくれるのですが・・・

時々、お友達からも「臭い」と言われてしまいます。

キーワード

- ・5歳
- ・パンツにうんちをする。
- ・おしっこはトイレで一人でできる。



ステップ2

Eくんの気持ち

- ・便器が冷たくていやなんだよ。
- ・穴が怖いよ・・・
- ・いきみ方が分からない。
- ・いつ出るか、わからないんだもん・・・

### ステップ3

#### 「暫定診断」：遺ふん症（いふんしょう）

トイレ以外の場所で、排便をしてしまう状態です。

はっきりとした理由はわかりませんが、理由の一つとして、トイレで排便することに不安があったり、下着をつけて立って排便するのが良いと思いついていたり、排泄の習慣がまだできていないためと考えられます。



### ステップ4

#### どんな対応ができるかな？

- 遺糞したことを叱らないようにしましょう。叱ってもよくなりません。
- これまでの成長や発達の状況を確認しましょう。
- 子供の排便リズムを把握し、できそうな時間に一日一回便器に座り、便器に慣れましょう。
- 失敗しても良いので、いやがらずに便器に座れるようにしましょう。
- 偶然、成功したら、褒めて繰り返すできるように働きかけましょう。
- 排尿は、引き続きトイレでするようにしましょう。
- 小学生になっても治らない場合は、病院で相談して排泄トレーニングをすることもあります。

「3あ主義」で行こう！

- ☆ あせらず
- ☆ あわてず
- ☆ あきらめず



## 事例6 ウロウロする子供

F君 5歳 男の子

F君は先生のお話を座って聞くことができず、すぐにウロウロ歩いたりします。紙芝居の時も同じ様子です。

キーワード

- ・5歳
- ・お話が聞けない。
- ・ウロウロする。



ステップ2

F君の気持ち

- ・お話、よくわかんないよ。
- ・紙芝居なんて、おもしろくないよ。動かないんだもん。
- ・向こうにある電車のオモチャで遊びたいなあ！

### ステップ3

## 「暫定診断」：注意欠陥多動性障害（ADHD）

脳の前頭葉、視床、線条体などが関係する実行機能がうまく働かない状態と考えられます。

注意を払ったり、「どうしようか？」と考えたり、「こうしたら、こうなる」と考えることがうまくできず、身体が動いてしまいます。

例えば、先生のお話を聞こうと先生の方を見ても、その後ろにあるオモチャに注意が向いてしまい、席を立てて遊びに行ったりします。



### ステップ4

## どんな対応ができるかな？

- 大人数では気持ちが落ち着かないことがあります。原則、少人数でやり取りをしましょう。
- 環境を工夫しましょう。  
例）お話をする時、先生の後ろにオモチャや時計など、子供の興味を引きそうなものを置かない。
- 今（これから）何をするのかわかるような工夫をしましょう。  
例）「絵カード」や、順序が分かるもの（目でみてわかるもの）の利用。
- 紙芝居よりも、パネルシアターや指人形などを活用しましょう（視覚に訴えるものや動きがあるものが良い）。

他にウロウロしてしまう原因として・・・

- 雑音が気になる。
- 長いお話はわからない。
- 今、何をするのかわからない。
- 身体がじっとしてられない。
- 座っている姿勢を保つことが難しい。
- 虐待による影響
- 内服薬の副作用（心臓病・喘息）
- 知的障害の合併など



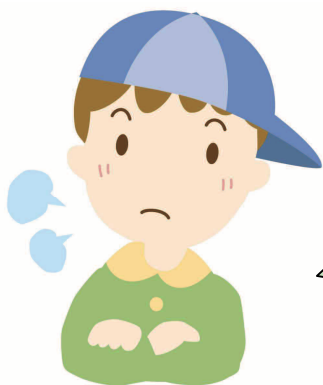
## 事例7 乱暴な子供

G君 男の子 5歳

G君はすぐにかっとなり、お友達をたたいて要求を通したり、大声をだしたり、泣き叫んだりします。今日もお友達が使っているおもちゃが欲しくて叩いてしまいました。また、いやなことがあると大きな声を出したり、泣き叫んだりします。

キーワード

- すぐにカッとなる
- たたく、大声を出す、泣き叫ぶ



ステップ2

G君の気持ち

- だって、おもちゃ使いたいんだもん！！
- 何て言ったらいいのかわからないよ・・・



### ステップ3

#### 「暫定診断」：注意欠陥多動性障害（ADHD）

感情中枢をコントロールしている前頭葉の機能が弱く、感情や衝動に対する抑制がうまく働かない状況です。

感情や衝動に対する抑制が不十分であるため、カッとなって手が出たり、大声を出したり、泣き叫んだりしてしまふことがあります。



### ステップ4

#### どんな対応ができるかな？

- 「こんな時はこうしよう」という場面を想定し、具体的に一緒に練習してみましよう。  
例) おもちゃを貸して欲しい時は、「貸してね」と言葉で言う練習をする。
- 思い通りにならなかった時、暴れる以外の表現をとれるように練習しましよう。  
例) 「残念」のポーズを決めて一緒に取ってみる。  
「残念だけど我慢する！」という言葉を使ってみる。
- 興奮がおさまらない時は場を変えてみましよう。  
例) 一度カッとなると、なかなか落ちつくことができない。落ち着ける場所へ誘導し、深呼吸する、お水を飲むというのも良い方法。
- 興奮のおさえ方を日頃から子供と相談しましよう。
- 得意なこと、できること（できたこと）を見つけて積極的に褒めましよう。自己肯定感を高めることが心の安定につながります。
- トラブルの状況を記録し、職員間で対応策を検討し、共有しましよう。  
どのような時にトラブルが起きやすいのか、どう対応したら良かったかなど、職員ミーティングなどで共有することで、子供の傾向がわかり、対応を考えることに役立ちます。

～ ✕毛 ～

